

「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」、これはマタイ福音書 6 章 24 節にある山上の説教の中の一文です。神さまを選ぶのか、それとも富を選ぶのか、そのようにも捉えることのできるこの言葉は、十戒の第一戒「わたしのほかに神があってはならない」を想起させます。

しかし聖書の中では、富はいつも否定的に捉えられていたわけではありません。特に旧約聖書においては、富は神さまからの祝福の象徴でした。アブラハムやヤコブといった族長は、神さまの祝福によって財産を増やしていきました。イエス様の時代においても、富んでいる人は神さまに祝福されている、つまり正しい人だと考えられていました。

ルカ福音書には「金に執着するファリサイ派の人々(16:14)」という言い方が出てきますが、お金(富)に執着することは、神さまの恵みに執着することに等しいと、彼らは思っていたようです。

しかしイエス様は、「金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。(マルコによる福音書 10 章 25 節)」と語ります。つまり、富との決別を求めておられるのです。

それではわたしたちは、財産をすべて教会にささげることが必要だということでしょうか。念のためにお伝えしますが、ちゃんとしたキリスト教会には、そのような考え方はありません。そうではなく、神さまからいただいた富を、どのように用いていくかが大切だということです。

イエス様は金持ちの男に言いました。「行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい(マルコ 10:21)」。富を自分のものだけにするのではなく、みんなと分かち合うことが大事なのです。

今回は「塗油」です。お楽しみに。



「愚かな金持ちのたとえ」

レンブラント・ファン・レイン

(1606~1669年)

この世で富んでいる人々に命じなさい。高慢にならず、不確かな富に望みを置くのではなく、わたしたちにすべてのものを豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。

(テモテへの手紙一 6 章 17 節)

